

## 論文

## 「文化転換」を超えて

—21世紀中国におけるフレドリック・ジェイムソン解説—

桑 島 由美子

## 要 旨

フレドリック・ジェイムソンの「文化（論）的転換」は、二つの世紀を跨ぐ消費社会の美学とその抵抗の可能性を問うものであった。「市場と消費に主導される政治経済の出現——ジェイムソンの二律背反は、経済も広告形象もイリュージョンも、美に回帰するという“美学の復興”でもある。」と陳永国は述べている。<sup>(1)</sup> 資本主義に対する最後の抵抗地域であるはずの「美学」「第三世界」「精神」へ商品形態が浸透することにより、ポストモダニズムは、資本主義システムの真の文化的な表現となる。抽象化する世界の物質的条件を問い、現実には「階級意識」と言い換えられたはずの「認知地図」<sup>(2)</sup> という新しい政治美学の観念から描く試みは、中国の批評言説の中でどのように解釈されてきたか、主に90年代から現在までの学術研究と批評テキストから分析してみたい。

キーワード：文化論的転換，弁証法の詩学，90年代文化思潮の新しい景観，モダニティの再叙事化，理論の逃走線，政治的無意識

## 序 カルチュラル・ターン「文化（論）的転換」

もしポストモダニズムによって資本主義との構造的断絶が起こったと言うことが可能ならば、マルクス主義的批判は無効となるが、反対にもしポストモダニズムが体系的变化を

表すことが示され、それが同時に資本の本質的性格を全て保持するならば、マルクス主義はその説明能力を保持する。ジェイムソンはポストモダニズムの概念をめぐって生じた相反するイデオロギー立場について示し、肯定的、否定的いずれの立場に立とうとも、それはある特定の歴史ヴィジョンの表明となると主張し、ポストモダニズムは空間と時間について根本的に新しい経験を導入すると言う主張から理論化を進めた。<sup>(3)</sup>

エルネスト・マンデルの『後期資本主義』を参照しつつ、ポストモダン文化を新時代の出現ではなく、資本主義の社会的・生産関係の強調、再構築を目指すものとした。ジェイムソンにとってポストモダンという用語は、特定の美学的あるいは個別のスタイルではなく、新しい形式的特徴の発生を、新しい型の社会生活や新しい経済の秩序の発生と結びつける役割を果たす時代区分概念である。

張旭東が言うように「自由市場の前に歴史が終焉を遂げた今日、ジェイムソンの理論はややもすれば時代に似つかわしくないと感じさせるものである。誰しもが政治を語らない時代に政治について語り、形式主義の思惟の時代に弁証法を語り、空間を考究する時代に歴史を強調し、このような意図的な不一致は、彼が終始、覚醒した批判者として存在することを知らしめるものである。」<sup>(4)</sup> 張旭東によれば、ジェイムソンが絶大な影響力を持った80年代とは異なり、90年代の経済転換、社会階層化、知識界分化によって中国の「知識生産の領域」も全面的に刷新された。しかしそれ故にこそ、その「後期資本主義の文化ロジック」と21世紀におけるその展開について、新しい解釈の試みが続いている。張旭東の言うように「全く誇張なく言って、17年来彼の存在は、当代中国文学批評と文化理論の外郭形成に影響を与えたのみならず、内在する問題意識を一新し、更にはイマジネーションと理論への激情の佐証となった。その浸潤する影響力は常規の西欧アカデミー言説の企及するところではない。」<sup>(5)</sup>

98年の『カルチュラル・ターン』においては、ジェイムソンは、ポストモダンは「パステイッシュ」が出現し、同時にパロディが不可能になった時代であるとし、「消費社会の美学」において「私たちが見てきたことは、ポストモダニズムが、消費者資本主義の論理を描写し、再生産し、補強することであった。より重要な問いは、ポストモダニズムにこのような論理に抵抗する方法があるか否かである。しかしそれは保留すべき問題である。」<sup>(6)</sup>と述べている。資本主義の第三段階については、「「イデオロギーの終焉」と「ポスト産業社会」という十分に成熟した概念へと転じた数々の有力な著作において、新しいメディア情報社会的現象は、(私たち不在のうちに)右翼によって植民地化されてしまった。」<sup>(7)</sup>しかしエルネスト・マンデルの著作『後期資本主義』が事態をすべて変えることになる。またエドワード・ソジャの『ポストモダン地理学——批判的社会理論における空間の位相』は、ポストモダンの裡に暗黙に存在している、新たな空間性の方向についての言説を屈折させ

ている。

「ここでは古い時間性はもはや存在せず、単なる静止的均衡状態であるランダムな変化という見せかけの概観、つまりはその一方、かつて第三世界として特徴づけられていたものが、第一世界の隙間に入り込み、第一世界を脱近代化し脱工業化し、あたかもかつて植民地的他者性にメトロポリスの中心化されたアイデンティティを与えたかのようである。——時間性という観点から解決しようと試みてきたことのすべては空間的マトリックスをくぐり抜けて、出発点での言明に必然的にもどってしまう。」<sup>(8)</sup>

ここ数十年の間、中国学術界において、ジェイムソンについての研究や論著は少なくないが、陳永国は『ジェイムソン—モダニティと資本の現代叙事』<sup>(9)</sup>の中で、ギデンズ、ハーバマスを援用して「ラディカル化するモダニティ」あるいは「未完のモダニティ」と同様、ジェイムソンの問題提起も、未完のプロジェクト、不完全な境遇、部分的な近代化という特徴を示しており、ジェイムソンの言うところの『後期モダニズム』（ポストモダニズムではない。）においてはいかなる分析もイデオロギー分析に他ならないと述べている。また『世界文学から世界銀行文学へ』<sup>(10)</sup>の中で新しい地球規模の経済内部での金融資本と投機の果たす構造的役割に着目している。

次に複数のテキストからジェイムソン解釈の諸相を見ていくが、最初にポストモダン文論によって触発された90年代中国の「後学論争」におけるジェイムソンの概念をめぐる解釈論争を取り挙げたい。

## 中国における批評理論発展への複雑な心境——中国解釈の焦慮

急速に進展するポストモダン状況へ反応として、「後学論争」における張頤武の論考「中国解釈の焦慮」<sup>(11)</sup>「中国解釈の焦慮について再び論ずる」<sup>(12)</sup>を見ておきたい。この中で張頤武は大陸文化理論発展の複雑性および知識人の叙事解釈能力の喪失を認めながらも、西欧主流イデオロギーによる「訓導」(pedagogical)式の批判を拒絶するという主張を貫く。張頤武によれば90年代以来中国大陆の経済と社会の発展は人々の予測に反して目覚ましい繁栄の局面を迎えたが、「歴史の皮肉」は、中国の政治、文化、経済の発展が知識人の理解から遊離し、既定の解釈モデルの理解からも遊離したことにあり、中国に対する解釈の焦慮を生んだ。中国大陆文化理論発展の複雑性は、知識人が80年代「啓蒙」「代言」の叙事の解釈能力を喪失し、瓦解したあと、グローバル化と市場化の進展の中での新しい文化解釈である。ここには二つの大きな背景があり、一つはグローバル化の進展が、グローバル空間の中での「中国」の位置づけを変えたことであり、中国は一方ではグローバル資本投資の焦点、国際貿易の新しい中心となり、情報のグローバル化伝播の世界体系に加わっ

た。今日においては、国際間の文化問題が「中国」にとってあまり問題でないとするような論点は、もはや成立しない。「高雅」な文化が蘇生、流行するなど、大衆文化の勃興が知識人にもたらした衝撃も複雑なものである。「人文精神」「ポスト国学」などの発展も、中国の直面する文化問題を超越しようと企図するものである。

## アメリカ文学研究者、趙毅衡の論点

張頤武によって「訓導」式の批判として拒絶された形の「後学」批判に対して、趙毅衡は、西欧の非西欧国家への覇権としての文化コントロール、地縁政治学に代わる地縁文化学、即ちポストコロニアルについて、そしてポストモダン状況における文化価値の転換、知識人の周縁化について危機意識を持つように、大陸知識人への覚醒を強く促す。趙毅衡は、欧米に滞在する中国人学者で、ロンドン大学東方学院教授として、欧米理論の中国文学への適用や、新批評、物語論の紹介や記号論について理論的専著がある。

「後学」と中国新保守主義<sup>(13)</sup>「文化批判とポストモダニズム理論」<sup>(14)</sup> 二つの論文において趙毅衡は次のように主張している。

ポスト構造主義、ポストモダニズム、ポストコロニアリズムの三者は、西欧の近年の文化批判において、急進的すぎるとしても、保守的と指摘されることはなかった。中国知識界の新保守主義は今に至るも、そしてその理論的根拠が post-ism から来ていることも十分注意されていない。「後学」という嘲笑的な言葉が中国に出現し、西欧では三つの post-ism が屹立して 20 年、中国に流入したいかなる言説も中国化されるが、なぜ誰もが保守的観点を支持するのか。「後学」の価値分化は、後期資本主義のグローバル化に対して価値の挑戦をつきつけたが、それは「多元分化」の呼び声のもと、アメリカ式俗文化に道を拓いた。ポストモダニズムは早くには 60—70 年代に勃興した幾つかの先鋒主義文学芸術を指して使われた。80 年代ジェイムソンとリオターラはこの概念を全面的に西欧当代文化に拡大した。とりわけ大衆メディアと「数値化」イメージ伝達の当代俗文化に拡大した。80 年代ジェイムソンが中国でポストモダニズムを講義したとき、中国の学界は、その文化研究の方法に興味を示したが、ポストモダニズムという言葉はまだ時流になっていなかった。しかし、先鋒文学が出現し、明らかにポストモダニズムの因子を備えた作品が世に出るとすぐさまその成熟と老練が進んだ。商業偽文化の氾濫と人心への浸透も進んだ。<sup>(15)</sup>

西欧の非西欧国家に対する覇権は、最も早くは領土侵略と移民方式の採用、これは植民主義である。第二次大戦後、民族独立が勃興し、西欧は政治コントロールを転用して、経済的搾取と結合させた。これは新植民地主義と言われた。しかし 70 年代以降、西欧はポスト工業時代に入り、市場に対する需要は、原料の需要をはるかに超越した。非西欧国家

は、深刻に分化し、あるものは経済的能力において西欧に追いつき、あるものは富裕レベルにおいて西欧を追い抜き、西欧の非西欧をコントロールする手段は文化的優勢となり、地縁政治学は地縁文化学となった。これがポストコロニアルであり、多くの理論家が処方箋を書いた。市場化は知識人が望んだことなのに、その現実を見て失望している。数量崇拜が全てを覆い尽くし、多元共存が多元同価に代わる。一律同価が俗文化崇拜を引き起こすのである。<sup>(16)</sup>

## 徐贲における解釈

後学論争において、劉康と張頤武に対して向けられた批判、即ちジェイムソンの「第一世界」の理論を用いて「第三世界」を描写しているとする批判に、両者は反駁している。張隆溪はジェイムソンにおける第三世界「民族諷寓」の概念を批判しながらも、ジェイムソンの著作には理論的基礎と深い洞察が見られ、また中国現代文学の研究者が理論的挑戦を提起し、普遍的な理論問題を討議するべきであると述べている。張隆溪の不満は、中国における「ポストコロニアル」「ポストモダン」全体に向けられている。徐贲は、「ジェイムソンにおける「ポストモダニズム」は経験的な叙述概念ではなく、批評目的に従う「協調性」概念である。」として、「この概念によって、社会文化批評者は、特定時期の文化現象と社会現象を連繫させ、社会制度を通して文化現象を認識させることができ、文化現象から社会制度の歴史的性質を認識することもできる。」<sup>(17)</sup>と述べている。

ジェイムソンは『ポストモダニズムと後期資本主義の文化ロジック』(*Postmodernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism*)の中で、とりわけ「ポストモダニズム」の命名問題について語っている。彼が指摘するのは、批評家は「歴史の中から断層か延続かを見る。…決して経験から実証したり、哲学を用いて弁解するわけではない。これは起始的叙述行為を本体としてそれが、叙述された事件に関して見方や解釈を決定するためである。」「ジェイムソンの「ポストモダン」受容は、後期資本主義の批判という目的から始まっている。ジェイムソンがしきりに強調するのは、「ポストモダン」は今日の「文化産品」を「社会制度」と「協調的に連繫させる。」助けになる概念であるということだ。「後期資本主義」に対するこのような社会制度の命名こそが「ポストモダン」という歴史時期の命名の核心である。ジェイムソンについて言えば、「ポストモダン」は単に文学芸術の新しい「現象」を評するのに便利な述語として与えられているのではなく、後期資本主義に対する「認知地図」(cognitive mapping)のプロセスとなるものである。この「認知地図」は、「常にあるものを新たに認識する習慣であり、進んで改変のために構想と新しい視覚を提起し、古い因習に対して感情と価値を一新する。」ジェイムソンは具体的な文学芸術現象を観察し、



イデオロギーと倫理の角度からそれらの置かれた社会制度に分析と評断を加える。彼は早くも1983年にポストモダン文化に対する論文の中で明らかに指摘している。彼が「ポストモダン」芸術の「雑多な寄せ集め」「模擬」「分裂」などの特徴に注目するのは、「ポストモダニズムがどのような新しい方式で後期資本主義に出現した社会秩序の本質と実情を表現しているか」例を挙げて説明するためである。<sup>(18)</sup>「ジェイムソンの「ポストモダン」の命名は彼の「後期資本主義」に対する社会制度の命名をその核心とする。「資本主義」に対する命名は、単なる一つの「名称」あるいは「コード」ではなく、それに対する非道徳的な（即ち「歴史性」）のなす最大限の概括である。ジェイムソンはマルクス主義者であり、従って彼が使用する「資本主義」という概念もマルクス主義の伝統の中で理解しなければならない。「資本主義」という概念を使用する社会学理論は当然マルクス主義だけではないが、しかしマルクス主義がこの概念を使用する時の特殊な価値傾向と道徳譴責性は、その運用に特殊な政治思想の批判的意義を具えさせた。資本主義制度に対するマルクスの分析は、資本主義の改変、人類解放という政治目標と切り離すことは出来ない。<sup>(19)</sup>「ジェイムソンの「ポストモダニズム」に対する分析は、まさに彼自らが述べるように、「後期資本主義」時期の特殊な「文化コントロール」を明らかにすることであり、それによって対抗の可能性を思い巡らすことである。少なからぬジェイムソン批判者が彼の「資本主義」に対する総括が対抗のために残した空間が狭いことを指摘したけれども、彼は終始堅持した。

このような分析をするのは、私たちが何が抑圧であり権力であるかを知っていれば別だが、そうでなければ対抗が有効であるか見積もることはできないと確信するからである。<sup>(20)</sup>

まさに現存社会制度とその文化コントロールに対する批判の眼差しから、ジェイムソンは「ポストモダン」という名称が文化現象と社会制度を「協調」し、「歴史再構築」の作用を起こすと考える。ジェイムソンは次のように述べる。

歴史の再構築とは、その全体の特徴と構想を提起し、目下の混乱錯綜した状況に抽象的概括を加え、時と場所を選ばぬ熾烈な介入に対して、またそれが内包する盲目的宿命的観点に対しても抵抗することである。<sup>(21)</sup>

歴史の再構築が指摘するのも、特定の歴史時期の非永続性、その特殊な圧迫形式と非道徳性である。」以上は中国における歴史区部である「ポスト新時期」の命名についての議論の中で、ジェイムソン理論への誤読を正すというコンテキストで語られた部分である。「ポス

ト新時期」理論家がジェイムソンを援用したことについて、徐賁は思想が内包する政治傾向の「変異」現象とも述べているが、関連するテキストについては改めて検討を加えたい。<sup>(22)</sup>

## 弁証法の詩学——張旭東による文化美学からのジェイムソン解説

西欧文論専攻の学者であり、ジェイムソンの翻訳紹介でも知られる王逢振は近著『交鋒 21 名著名批評家訪談録』<sup>(23)</sup>の中で、20 数年に渉るジェイムソンと中国との交流について詳述している。王逢振によれば、82 年秋、カリフォルニア州立大学ロスアンゼルス校を訪問した際、当校の Robert Maniquis 教授を通じて、同時期、講義に招かれていたジェイムソンと知り合うが、その後二人の間で密接な交誼が途絶えることはなかった。1985 年にジェイムソンがデューク大学に着任すると間もなく、大学の特別な取りはからいによって、85 年秋から一学期間、中国で講義を行うため派遣される。(講義録は後に『后現代主義和文化』として出版される。) この時デューク大学は中国から二人の博士学生を招聘するが、その一人唐小兵は、南カリフォルニア州立大学教授、また李黎は中米文化交流基金の理事長となっている。ジェイムソンは中国への思い入れが強く、後に三人の博士学生を招聘して奨学金も全額供与するが、それが張旭東、王一蔓、蔣洪生であり、張旭東は現在ニューヨーク大学比較文学教授である。

張旭東は 1997 年に『晚期資本主義的文化邏輯』を翻訳、紹介しており、アメリカで出版された著書として、張旭東編 “Whiter China? Intellectual Politics in Contemporary China”, Duke University Press 1998 アリフ・ダーリクと共編 “Postmodernism & China”, Duke University Press 2000 張旭東による単著 “Postsocialism and Cultural Politics China in the Last Decade of the Twentieth Century” Duke University Press 2008 がある。

その専著の中で、張旭東は少なくとも中国における「新左派」の理論的根拠としてのジェイムソンの位置づけを明確にしており、Ren Jiantao による “jiedu xinzuopai”『解説新左派』を引用して、新左派が拒絶するものは、(1) liberal discourse (2) free-market rationality, and (3) established social scientific approaches であり、「新左派」の靱帯となるのは Frankfurt school, Fredric Jameson, Michel Foucault, Edward Said, the communitarians, analytical Marxism, critical legal studies 等であるとしている。<sup>(24)</sup> 新左派の定義および、誰が新左派なのかという問題については、張旭東の記述は参考になるであろうと思われる。シカゴとコーネルで政治科学の学位を取得した崔之元と王紹光、アンソニー・ギデンズの弟子である黄平、文学では劉康とリディア・リウ、がマルキスト、フェミニスト／ポスト

コロニアルの代表とし、最大の陣営としては汪暉が挙げられている。<sup>(25)</sup>

『弁証法の詩学—ジェイムソン解説』<sup>(26)</sup>の中では、文化美学の視点からの理論解説とジェイムソンの人物像が次のように語られている。恭しく居並ぶ西欧中産階級アカデミーのエリートの中で理論の政治性を語るのは、スタンダールが言うように「音楽会で発砲するようなもの」かも知れない。しかし歴史の真理を以て終極の目標とする理論活動は理論言説とイデオロギー、階級的立場、生産方式関係の問題を回避できない。現象界には連続性と非連続性があり、理論の虚構は非合法ではない。もしすべてが叙事だと言うなら、知識思想の論争は即ち叙事と叙事との間の論争となる。理論は往々にして理論そのものの限界性を隠蔽する。ジェイムソンがマルクス主義を厄介に思うのは、それが矛盾を処理するばかりでなく、自身の矛盾も含めて主体的に矛盾を尋探することである。この様にして現実世界の矛盾は理論の発展を促すことになる。ジェイムソンの認識においては、理論の間にはポストモダンが称揚するような平等な関係にはなく、それらの間の格付けは矛盾をめぐる能力に対応する。ここにおいて彼はポストモダニズムが相対主義を絶対化することを拒絶する。<sup>(27)</sup>

モダン派とポストモダニティの転接点にあつて、ジェイムソンは風格の統一性と内在するユートピア思想について既に強調しているが、同時に躊躇なく意識的に、能動的に風格、形式、象徴の空間を遮断し、それゆえに異なる領域の“相対的自律性”によって十分に経験世界の養分を吸収する。

文化多元主義と「ポストコロニアリズム」が興起すると、ジェイムソンのような西欧マルクス主義者にも時折「西欧中心主義」の帽子が被せられる。事実上、ジェイムソンの胸中にある「中心」はアメリカである。誘惑とイリュージョンに満ちたアメリカのライフスタイルや生産方式の背後にあるのは「この上なく無情な資本主義制度」であり、日に日にその覇権を確立しているが、ジェイムソンはそれを単純に否定するのではなく、人類には、他の想像力や異なる生活方式を保持する可能性があると考えているのだ。

事実上、アメリカにおいてジェイムソンは厳密な意味での公共知識分子ではなく、学术界に君臨する学者であるが、知識言説の趣向は、公共の政治概念を再構築する性格のものである。ジェイムソンが懸念しているのは、アメリカでは一度主流の対話に入ると主流イデオロギーがあまりに強いために知識人は対抗できず、ほとんど言説を失ってしまうことである。私たちは西欧批判知識人が特定の歴史的条件のもとで苦難に満ちた理論的営為を進めていることを過小評価してはならない。<sup>(28)</sup>

このように張旭東は「叙事」をキーワードにジェイムソンの理論を解説するが、それを補足する意味で、王逢振の『政治的無意識』<sup>(29)</sup>に関わる批評を見ておきたい。中国で刊行された『詹姆遜（ジェイムソン）文集』の主編である王逢振は、『政治的無意識』をジェイ



ムソンの著作及びその理論を理解する上で最も基本的な文献とし、「カテゴリーとしての叙事」をめぐって次のように述べている。「ルカーチの啓発を受けて、歴史叙事によって、文化テキストがどのように「政治無意識」を包含するか、あるいはそこに埋め込まれた叙事と社会経験について、いかに複雑な文学解釈でそれらを説明できるか述べている。『政治的無意識』の中で、ジェイムソンは明らかに資本主義初期資産階級の主体の構成と、資本主義社会の中での資産階級の主体の分裂について述べている。」<sup>(30)</sup>とし、『政治無意識と文化闇積——解説《政治無意識》』の中ではジェイムソンにおける叙事を多向調和的機制であり、またカテゴリーとしての叙事は文化分析に最も適合する方式であるとしている。「ジェイムソンの分析においては叙事の主要な動力は一種のユートピアの衝動に変わる。」<sup>(31)</sup>「批評は包容性を具えるが、その全体性を否定し得ない、これはまぎれもなく調和としての叙事の具える悖論式の優勢である。ジェイムソンの批評論述においては、(コンラッドやバルザックの部分のように)カテゴリーとしての叙事は文化分析に最も適合する方式と言える。欲望とイデオロギーの叙事構成に注目し、この様な開放と閉鎖システムによって構築された歴史に注意を向けてこそ、全文化生産の戯劇性が明らかになる。注意を要するのは、ジェイムソンの実例では、それは私たちに叙事化の行為によって基礎と上部構造との関係を記述させるものであって、それを起源を同じくする単純な反映あるいは創造と見做すものではない。」<sup>(32)</sup>

## 理論の逃走線 モダニティと資本の現代叙事

陳永国の近著『理論の逃走線』(2008年)<sup>(33)</sup>では、ジェイムソンの他に、デリダ、ドゥルーズ、スピヴァクなどフランスとアメリカの批評家を中心とし、モダニティ、ポストモダニティ、文化批評をめぐる批評実践が取り上げられるが、第5章『ジェイムソン：モダニティと資本の現代叙事』においては概ね理論の紹介がなされている。「モダニティは、概念ではなく、叙事のカテゴリーである。」という言葉キーワードに、脱領土化の問題についても詳述している。陳永国による分析は、以下のように要約できる。

叙事に対する排斥や放棄は、抑圧された叙事の回帰を求める要求となる。見掛け上は叙事に見えない概念も、必然的にイデオロギー概念を隠蔽している。批評家の任務は抑圧された、潜在的なイデオロギーを掘り起こすことにある。これは彼の政治的無意識に対する新しい解釈である。グローバル化モダニティは様々な概念上、哲学上の矛盾を内包している。ジェイムソンは、ポストモダンとは二重の脱領土化の時代であるとして、ひとつは、資本がさらに収益の上がる生産形式に移行して往々にして、新しい地理的位置に「逃避すること、もう一つは、あらゆる生産を放棄して、非生産空間の最大化をはかり、土地や都市

空間への投機にはじまり、新しいポストモダン情報化、土地と地球の抽象化、に向かうことである。グローバル化の再コード化と再領土化の作用を拒むために必要なのは、一種の再叙事化である。金銭が一旦抽象に変わり、空洞となり、その物質的意義を喪失したなら、それはすでに「生産も消費も必要としない金融実体の架空の空間での戯れを指すにすぎない」のであり、ポストモダニティの中で進行する「叙事化」は、モダニティへの反思を基礎とする。すなわち必然的に全てはモダニティの「再叙事化」にかかっており、叙事の再現は、一つの言語再生モデルとも言い得る。叙事が歴史性を維持するなら、様々な空間性のイリュージョンは時間の有限性の中に復元する可能性がある。イデオロギー分析も当然、歴史化から始めなければならない。よって「モダニティは概念ではなく、叙事のカテゴリーにある。」と言い得るのである。<sup>(34)</sup>

最終章である第8章においても『世界文学から世界銀行文学へ』<sup>(35)</sup>として、ジェイムソンが引用されている。

2004年に清華大学で開催された「批評探索——理論の終焉」国際シンポジウム<sup>(36)</sup>での発言を引用しつつ次のように述べている。「“グローバル化”は、特殊な歴史過程であり、帝国主義や旧式の貿易ネットワーク、また「国際主義」の含意とは全く異なっている。グローバル化は資本主義発展の第三段階であり、技術的に見れば、制御とコンピュータによって成就され、制御とコンピュータによって生産を成就する——古典的な工業生産とは異なるところの生産である。その特徴は商品化と労働のトランスナショナルな稼働を普遍化するところの、時にそれは、厳密にはアメリカ化と言い切れないところの、文化の上層構造にあり、私たちがポストモダニズム、ポストモダニティと呼ぶ、20世紀80年代から90年代に出現した金融資本主義と密接な関係がある。…この定義では明らかに“グローバリズム”を帝国主義や国際化と区別している。」<sup>(37)</sup> ジェイムソンの学術用語ではグローバリゼーションは認知地図であり、資本主義のグローバル化の縮影、寓言の絵図である。資本主義の文化転型を背景とする認知地図と世界銀行文学／批評とは通ずる点があり、その美学的な座標は、「ポストコロニアル研究」に新しい思考を加え、資本主義世界体系内部の異なる空間の関係性を焦点化する。デヴィッド・ハーヴェイが「グローバル化」を「不均衡な地縁発展」と言い換えたように、資本主義の矛盾したロジックは多様な空間に顕れ、グローバル化は一連の歴史の“空間定型”(spatial fixes)と再領土化の最新の表現に過ぎない。Kumarがポストコロニアル文学を世界銀行文学に置き換え、ジェイムソンが認知地図に読み替えたのも同様に新しい解説、新しいイマジネーションによるものである。と述べている。<sup>(38)</sup>

## 結語

改革開放時期の中国における「文化論的転換」を促したとされるジェイムソンのポストモダン文論は、90年代中国の文化批評では論拠として解説され、批評理論発展を深化させた側面がある。80年代から今日まで、ジェイムソンの著書は、出版と同時に翻訳紹介され、共時的に受容されたが、『カルチュラル・ターン』（98年）はちょうど二つの世紀の挟間に当たり、中国においては消費美学についての議論が、成熟し加速化した時期と言える。また、金融危機後のグローバル経済の様相は、『理論の逃走線』におけるようなジェイムソン再読を改めて促すものであり、後期資本主義の世界論理（グローバル・ロジック）とそのイデオロギー分析を通して、抽象化する世界を、歴史化と叙事の再生へと導くジェイムソンの批評営為は、「もし全てが叙事だと言うなら、知識思想の論争は即ち叙事と叙事との闘争である。」という張旭東の言葉に集約される可言えよう。

批評においても、学術研究においてもジェイムソンの影響は広範に及び、ここで取り上げられなかったものとして、林慧の『詹姆遜烏托邦思想研究』<sup>(39)</sup>、吳琮『走向一種弁証法批評——詹姆遜文化政治詩学研究』<sup>(40)</sup>などがある。現代思想や、仏文、独文などの比較文学研究で取り上げられるほか、中国ではマルクス主義哲学の研究者によって、解説が進められている。

## 註

- (1) 陳永国『理論的逃逸』北京大学出版社 2008年 陳永国は清華大学大学院教授。
- (2) 「認知地図」の原語はcognitive mappingで陳永国の中国語訳では、「認知測繪」が当てられている。
- (3) ショーン・ホーマー「フレドリック・ジェイムソン（ハンス・ベルテンス／ジョウゼフ・ナトーリー編 土田知則・時実早苗・篠崎実・須藤温子・竹内康史訳『ポストモダニズム』新曜社 2005年）
- (4) 張旭東『辯証法的詩学——解讀詹姆遜』（『批評的踪跡——文化理論与文化批評 1985-2002』）生活・読書・新知 三联書店 126頁
- (5) 同上 122頁
- (6) フレドリック・ジェイムソン 合庭惇 河野真太郎 秦邦生訳『カルチュラル・ターン』作品社 2006年 35頁
- (7) 同上 53頁
- (8) 同上 86頁
- (9) 陳永国『詹姆遜 現代性与資本的現代叙事』（『理論的逃逸』北京大学出版社 2008年）
- (10) 陳永国『从世界文学到世界銀行文学』（『理論的逃逸』北京大学出版社 2008年）
- (11) 張頤武「闡析「中国」的焦慮」汪暉編『90年代「後学」論争』香港中文大学出版社所収
- (12) 張頤武「再說「闡析中国」的焦慮」汪暉編『90年代「後学」論争』香港中文大学出版社所収

- (13) 趙毅衡「『後学』与中国新保守主義」 汪暉編『90年代「後学」論争』所収
- (14) 趙毅衡「文化批判与後現代主義理論」 汪暉編『90年代「後学」論争』所収
- (15) (16) 趙毅衡「『後学』与中国新保守主義」 同上『90年代「後学」論争』所収
- (17) (18) (19) 徐真「什么是中国的「後新時期」？」 同上『90年代「後学」論争』所収
- (20) Anders Stephanson, “Regarding Postmodernism: A Conversation with Fredric Jameson”
- (21) Fredric Jameson: “Postmodernism, or, the Cultural Logic of Late Capitalism”, *New Left Review*, no.146 (1984): 53-92
- (22) 関連するテキストとしては徐真「『第三世界批評』在當今中国的處境」「再談中国「後学」的政治性和歷史性」 汪暉編『90年代「後学」論争』香港中文大学出版社所収がある。
- (23) 王逢振『交鋒 21位著名批評家訪談錄』世紀出版集團 上海人民出版社 2007年 所収の「老友弗雷德里克・詹姆遜」を参照のこと。
- (24) (25) Xudong Zhang. *Postsocialism and Cultural Politics: China in the Decade of the Twentieth Century* p54 p80 ~ 82. Duke University Press 2008
- (26) 張旭東「辯証法的詩学——解讀詹姆遜」（張旭東著『批評的踪跡 文化理論与文化批評 1985-2002』生活・讀書・新知 三聯書店 2003年）
- (27) 同上 125-126頁
- (28) 同上 127-128頁
- (29) 「ジェイムソンにとっては五番目の著作にあたる本書はまた、現代の批評理論を探る三部作（と称されるにいたった）の最後の著作であり、いまのところジェイムソンの主著と言っていい。」フレドリック・ジェイムソン 大橋洋一・木村茂雄・太田耕人訳『政治的無意識』平凡社 1989年初版 p388  
中国での翻訳テキストとしては 詹姆遜著 王逢振他訳『政治無意識』北京 社会科学出版社 2000年がある。
- (30) (31) (32) 前掲 王逢振著『交鋒21位著名批評家訪談錄』所収  
「政治無意識与文化闡釋——解讀『政治無意識』」
- (33) 陳永国『理論的逃逸』（*Lines of Flight in Theory*）北京大学出版社 2008年
- (34) 陳永国「現代性与資本的現代叙事」『理論的逃逸』北京大学出版社 2008年  
この論文が主に依拠しているジェイムソンのテキストは、①Fredric Jameson, *A Singular Modernity; Essay on the Ontology of the Present*, London: Verso, 2002 ②Fredric Jameson, “Culture and Finance Capital”, in *The Jameson Reader*, Michael Hardt and Kathi Weeks (ed.), Blackwell, 2000である。
- (35) 陳永国「从世界文学到世界銀行文学」『理論的逃逸』北京大学出版社 2008年  
この論文の中で引用されているのは、Amitava Kumar, Introduction to *World Bank Literature*, Amitava Kumar (ed.), Minneapolis and London: University of Minnesota Press, 2003
- (36) 『グローバル化とサイバーパンク』は、2004年6月11-15日に清華大学で開催された国際シンポジウムにおけるジェイムソンの発言であり、主な内容は2005年出版された『未来考古学：名叫烏托邦的欲望与其他科幻小説』（*Archaeologies of the Future: The Desire Called Utopia and Other Science Fictions*）に収められている。
- (37) (38) 前掲 「从世界文学到世界銀行文学」
- (39) 林慧著『詹姆遜烏托邦思想研究』中国人民大学出版社 2007年
- (40) 吳琼『走向一種辯証法批評——詹姆遜文化政治詩学研究』上海三聯書店 2007年6月

## 「文化轉換」を超えて

### 〈ジェイムソン翻訳文献〉

- (1) F.R. 詹姆遜 時間的種子 王逢振訳 鳳凰出版伝媒集団 2006年
- (2) F.R. 詹姆遜 后現代主義与文化理論 詹姆遜講演 唐小平訳 北京大学出版社 2005年
- (3) F.R. 詹姆遜 単一の現代性 王逢振, 王麗亜訳 天津人民出版社 2005年
- (4) F.R. 詹姆遜 詹姆遜文集 王逢振編 北京: 中国人民大学出版社 2004年
- (5) F.R. 詹姆遜, 三好将夫編 全球化的文化 馬丁訳 南京 南京大学出版社 2002年
- (6) F.R. 詹姆遜 政治無意識 王逢振他訳 北京 社会科学出版社 2000年
- (7) F.R. 詹姆遜 文化転向 胡亜敏等訳 北京 社会科学出版社 2000年
- (8) F.R. 詹姆遜 快感: 文化与政治 王逢振等訳 北京中国社会科学出版社 1998年
- (9) F.R. 詹姆遜 布莱希特与方法 陳永国訳 北京 社会科学出版社 1998年
- (10) F.R. 詹姆遜 晚期資本主義文化の文化邏輯 張旭東編 陳清僑等訳 北京 三聯書店 1997年
- (11) F.R. 詹姆遜 語言の牢籠 錢佼汝訳 南昌 百花州文芸出版社 1995年
- (12) F.R. 詹姆遜 馬克思主義研究 李自修訳 南昌 百花州文芸出版社 1995年